

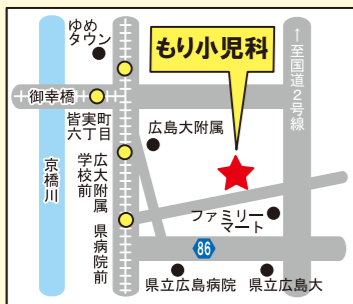
今回は、地域の方々が「あって良かった」と思えるような医院を目指して取り組んでおられる、もり小児科、森先生です。



右側が森先生です。

もり小児科

〒734-0005
広島市南区翠2-27-27
電話/082-251-1717
院長/森 美喜夫
診療科/小児科



○いつ開業されましたか。

2000年3月まで県病院に勤めて、4月に「もり小児科」を開業しました。

○病児保育をされていますね。

地域の小児科医院ができる子育て支援の1つとして2004年から開始しました。県病院と一緒に働いた河村師長さんがちょうど定年退職されて当院へ来てくれたので、河村師長に主に担当してもらっています。年々利用が増えて嬉しく感じています。

○毎日の診療で大切にされていることは何ですか。

子どもは免疫を持っていないので色々な病気に罹りますが、大抵は子ども自身の力で病気を治します。診療ではそのサポートに心がけています。しかし、数少ないものの重症の病気がありますので、見逃さないように適切な診断と治療に努めています。

また病気やそのケアの知識は、家庭での子育てで大切なので、診療の時に伝えるようにしています。

○開業医としてやりがいを感じる場所はどんなところですか。

子どもの成長を見ていける点です。親御さんの成長もみることができず。

子どもが大きくなって、もり小児科が「あってよかったな」と思っていたければ最高です。

今春、県病院から木下先生に来ていただき一緒に診療することになりました。これからも「あってよかったな」と地域の方々に思ってもらえる医院を目指します。

○県病院は先生にとってどんな存在ですか。

頼りになる病院で、困ったときは県病院です。小児内科だけでなく、いろんな疾患について対応していただいております。

【取材後記】

取材スタッフも、現在、子どもを育てている一人の親として、森先生のような医院があることを本当に心強く、また、嬉しく思いました。



県立広島病院 〒734-8530 広島市南区宇品神田1丁目5番54号

※県立広島病院の様々な情報をホームページへ掲載しています。
県立広島病院 で 検索 (URL: <http://www.hph.pref.hiroshima.jp/>)

理念：県民の皆様に愛され信頼される病院をめざします

ボランティア清掃を行いました!!



参加メンバーです



こんなに集まりました



院長先生も一緒です



植木の刈り込みをしています

県立広島病院からのお知らせ

院内講演会

とき 平成24年 **5月18日** (金)
18:00開始

ところ 中央棟 2階講堂

講師 熊本大学生命科学研究部
放射線診断学分野 助教
白石 慎哉 先生

演題 SPECT/CT 融合画像の有用性

問い合わせ先 県立広島病院
TEL:082-254-1818

5月のがんサロン

とき 平成24年 **5月23日** (水)
14:00~15:30

ところ 新東棟2階 ラウンジ

内容 交流会
対象 当院に悪性腫瘍(がん)で
通院または入院患者様及び
ご家族

問い合わせ先 地域連携科
TEL:082-256-3562(直通)

※詳しくは県立広島病院ホームページへ 県立広島病院 で 検索 (URL: <http://www.hph.pref.hiroshima.jp/>)

外来診療のご案内

診療受付時間

午前8時30分~午前11時00分
※午後の診療は科によって異なります。

休診日

土曜日・日曜日・祝祭日
年末年始(2月29日~1月3日)

紹介状持参のお願い

初診時、他の医療機関からの紹介状をお持ちでない場合、保険診療費のほか2,620円のお支払いが必要となります。初診の際には、紹介状をお持ちください。

※当院では、予約診療を優先して診察しています。予約診療以外で受診されると待ち時間が長くなる場合がありますので、ご了承ください。

ワンポイント健康メモ

— 野菜を食べて生活習慣病を予防! —

野菜は、抗酸化ビタミンをはじめ生活習慣病を防ぐさまざまな健康機能があります。今が旬の春の野菜は鮮やかな緑色。食卓が華やかになります。

○抗酸化ビタミン

(ビタミンC、E、βカロテン)

体内に発生した活性酸素を消去するのが抗酸化ビタミン。がん、動脈硬化、循環器病の予防になります。



○食物繊維

腸内の有用菌を増やし、スムーズな排便を促します。大腸がんの予防に必要です。食物繊維は“根”や“果”に豊富です。

○カリウム

ナトリウムを体外へ排出。血圧の上昇を防ぎ、循環器病の予防になります。

○カルシウム

骨粗鬆症の予防や歯の健康に必要。カルシウムは“葉”に豊富です。(栄養管理科)

★簡単メニュー紹介★

クレソンのごま和え



一般的には肉料理の付け合わせですが、さっと茹でて、しょう油、砂糖、ごまで和えると食べやすく、程よい苦味が体を元気にしてくれます。めんつゆと削り節をかけてもおいしいです。旬のおいしい季節にどうぞ。

野菜の食べる量は:目標 1日350g以上!

- 手ばかりで両手3杯が目安
(その内1/3は緑黄色野菜、2/3は淡色野菜)
- 1食分約**120g**の野菜の目安は



生野菜なら
両手いっぱい



加熱した野菜なら
片手にのる量

名医に会いたい!!

当院には、腕のいい医師が沢山います。その中の一人、耳鼻咽喉科・頭頸部外科の福島典之先生は、耳の手術「鼓室形成術」を数多く実施している医師として、全国的な雑誌にも取り上げられています。(週刊朝日MOOK「手術数で分かるいい病院全国ランキング2012」の中で、県立広島病院は、「鼓室形成術」の手術数で全国12位にランクインされ、主な担当医師として福島先生が紹介されました。) このコーナーでは、福島先生が得意としている耳の治療や手術のことについて、紹介します。

「手術数でわかるいい病院全国ランキング」に掲載されました!!



耳鼻咽喉科・頭頸部外科主任部長
福島 典之部長

耳の手術「鼓室形成術」とは。

鼓室というのは、つち骨、きぬた骨、あぶみ骨という三つの耳小骨がおさめられている小さな部屋のことです。これらの骨を削るなどして再建するのが、鼓室形成術です。鼓室形成術を実施する目的は、慢性中耳炎の炎症を止め、聴力を改善することです。三半規管や顔面神経などに近い繊細な部分を扱うため、高い技術力が要求されます。

慢性中耳炎にはどんなものがあるのでしょうか。

慢性中耳炎には、「穿孔性中耳炎」、「癒着性中耳炎」、「真珠腫性中耳炎」などがあります。穿孔性中耳炎と癒着性中耳炎は、どちらも炎症が奥まで進み、耳小骨にまで障害が及んでいる場合は聴力改善のため、鼓室形成術をする必要があります。

真珠腫性中耳炎は、なぜ起こるのか原因ははっきりとはわかっておらず、ある意味、特殊な中耳炎といえます。

特殊な中耳炎「真珠腫性中耳炎」とは。

真珠腫性中耳炎は、耳の中に何らかの原因で白い塊の真珠腫ができて、炎症が起こる病気です。

真珠腫ができて、初期だと自覚症状はありませんが、真珠腫に細菌が感染すると耳だれが生じたり、耳小骨が溶けて聴力に障害が起きます。病気が進むと、顔面神経や三半規管にも影響が現れて顔面神経のまひやめまいなどが起こり、さらに進行すると髄膜炎を起こすこともあります。

「真珠腫性中耳炎」は、どのように治療するのですか?

真珠腫性中耳炎の治療の場合、基本的に真珠腫を取り除く手術をします。真珠腫は少しでも取り残しがあると再発してしまいますが、その位置などによっては完全に取除くのがむずかしいこともあるため、手術を受けても5~10%程度の割合で再発すると言われています。そのため、手術を2回に分けて実施することもあります。

手術には、主に、「オープン法(外耳道削除型鼓室形成術)」「クローズド法(外耳道保存型鼓室形成術)」「オープン法+再建術(外耳道削除型鼓室形成術・外耳道再建術)」などの方法があります。

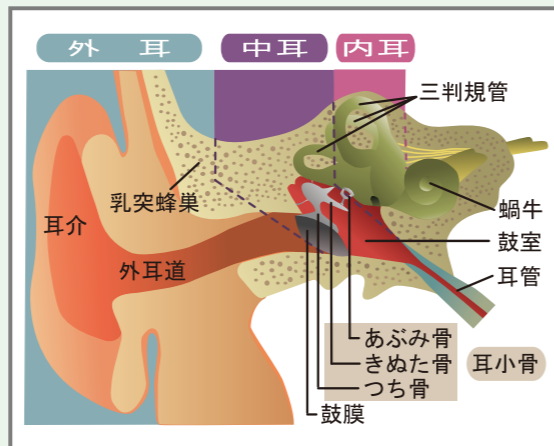
鼓室形成術は耳の後ろを切開しますが、耳の構造上、どうしても死角になる部分が出てきます。そこで乳突蜂巣と外耳道間の骨の一部を削り取って一つの広い空間にして視野を広げ、手術をするのがオープン法です。

一方、なるべく元の状態を残そうと、極力削る部分を抑える手術のやり方をクローズド法といいます。

オープン法は真珠腫の取り残しが少ないのが利点ですが、削る部分が多いので術後の回復に時間がかかります。また、大きな空洞部分に菌感染を起こしやすい、また、聞こえが多少犠牲になるという問題がありました。

そこで最近では、このオープン法で削ったあと、元の状態の耳に近づけるため、削った部分をつくり直す手術を組み合わせた「オープン法+再建術」を実施する病院が増えています。

当院の福島先生は、この「オープン法+再建術」を多く治療に取り入れています。



ということで、ここから、福島先生に質問です!!

Q:真珠腫性中耳炎の手術に、「オープン法+再建術」を選択するメリットはなんですか?

A:『真珠腫性中耳炎の再発を少なくするためには、広く視野をとって、きれいに病変をとり、組織を再建するというやり方がベストです。「オープン法+再建術」は、視野が広いので手術時間もより短くてすみます。大体、手術は1~2時間程度で終了します。』

Q:手術を2回することもあるということですが、なぜですか?

A:『真珠腫は、目に見えない程度のごく微細な取り残しがあれば再発してしまいます。また、もともと真珠腫ができる原因がはっきりとわかっていないため、一度なった人は再発する可能性があります。そこで手術を2回に分けて実施することがあります。』

また、真珠腫の状況や検査結果などから、術前に1度の手術ですむと思っても、実際に患部を開いて見ると2度に分けたほうがいい場合もあります。また、炎症が強い場合は、耳小骨の再建を後からしたほうが成功率が高いので、1度目の手術で真珠腫をとり、10ヶ月~1年ぐらいたった後、機能回復のための2度目の手術をすることもあるんですよ』

Q:なるほど。状況に応じた適切な判断が必要なのですね。それでは、福島先生。最後に一言、お願いします。

A:『真珠腫性中耳炎は手術が成功しても、再発することのある病気です。できれば手術をした医師に術後も診てもらえるのが理想的ですね。』

研鑽を重ね、技術と芯に磨きをかける福島先生。「県病院のジョージ=クルーニー」は、福島先生で決まりですね!! どうも、ありがとうございました。

外科医の独り言 no.8

— 先輩の名言 —

前号の「外科医に贈ることば」には載っていませんが、尊敬する先輩の格言で印象に残っているものがあります。外科医になって約30年間、今もその言葉を肝に銘じて診療してきました。本には載っていないので広島弁が混じっています。

まずは、「手術した患者さんの術後経過は、99%手術の良否で決まる」。当たり前と言えば当たり前です。別の先輩は、「手術の後は患者さんが勝手に治っていく、医者がいらんことせんかったら」。当時は、術後合併症の予防に色々な薬が使われ、万全を期しているつもりでした。そして、患者さんが順調に回復すればその薬のおかげ、と信じていたのです。しかし、前者の先輩は、そんな薬を使っても使わなくても結果は手術が終わった時に決まっているんだよ、と言っているのであり、後者の先輩は、患者さんに不必要な治療はせずに“自然治癒力”にまかせれば良い、と言っているのです。石橋をたたいて渡っても叩きすぎて石橋を壊しては何もなりません。患者さんを治してあげたのではなく患者さんが自分で治した、手術はその手助け、と言いたかったのです。その後、薬を恐る恐るやめてみましたが、確かに何も起こらなかったのです。ここで誤解を招いてはいけないのですが、予防効果のあることが医学的に証明されている薬は現在も使われています。また、術後合併症が起こった時には薬を適切に使うことにより、患者さんもその恩恵に預かっていることは間違いありません。もちろん、薬の助けを借りながらも最終的には患者さん自

身の“自然治癒力”がものをいってきます。

現在、当時とは比べものにならないほど手術手技も進歩していますが、一方では当時手術が難しかった高齢の患者さん、高血圧、糖尿病など様々な病気を複数同時に持っている、いわゆる“自然治癒力”が低下しているかもしれない患者さんも手術の対象となっています。100%の手術ができたとしても術後の合併症が起こりうるということです。したがって手術前の説明では、「こういうことが起こるかもしれません」、「ひょっとしたらこれも起こるかもしれません」と悪い結果の説明がしつこく行われます。説明義務があり、あとで「聞いていない」と言われても困るからです。しかし、患者さんからすれば、脅かされて気分が落ち込み手術を受けたくなくなるのも無理はありません。せっかくの“自然治癒力”も萎えるかもしれません。あらゆることをしっかり受け止めて手術に臨みたい患者さんと、説明が進むにつれて落ち込んでいく患者さんを見極めて、臨機応変に説明を変えても説明義務違反にはならないと思うのですが…後輩から「先生の説明はいつも短いですね」と言われても、説明は分かりやすく、簡潔に、なおかつ臨機応変を実践すると短くなる?



消化器・乳腺・移植外科
板本敏行(いたもと としゆき)

看護部だより

患者さんに安心して頂ける検査を心がけています

内視鏡検査

スピーディで正確に検査や処置を進めることが大切なことだと考えており、医師等のスタッフとも連携して頑張っています。

そのためにスタッフ一人ひとりが専門的知識・技術を身につけ、常に患者さんの状態に気を配り、細やかで安全・安心な検査・治療を受けていただけるよう努力しています。また笑顔で心がけ患者さんに優しい対応ができるよう頑張っています。



病気の早期発見などを目的とした内視鏡による検査の需要は近年、非常に多くなっています。内視鏡検査室では県病院において各診療科にて行われている内視鏡診断、治療を行っています。最近は鎮静剤を使用したり、鼻から入れる苦痛の少ない胃の内視鏡を行い多くの方から喜ばれています。検査や治療は、患者さんにとっては、あまりやりたくないこと、不安なことだと思います。ですから、患者さんの負担や不安を軽減するためには、